



中村俊定文庫
文庫 18
202





續江ノソウ

第一

花標のすつてん日ごしを盡
証あり余を化して行跡
名動し文代表は信譽あり
何ら直に端ご般月炎病
招く如缺るる月の依り
権くは心こ縁は新証



鷹田氏
青嶽

甲斐国

長原秋

上野新井

松平一

敵

伴像夫のうら松筋と鳴り也
松のうら松筋と鳴り也
 土着舞舞を神楽乃礎
 麻の葉をやま也と流る赤雲
 流るとやま目。如月と上
 村子と舞舞を神楽乃礎
 日如月一う舞舞に仕舞也
 能、梅雨のうら松筋と鳴り也
 手水。流る代々乃流

跡見との像神乃舞の段し
 産頭乃舞了名園とや流
 入月流流の葉をさるや戸橋
 宗良と流了木俣空食
 常如かのうら松筋と鳴り也
 名流に飛さるも如雲と
 舞の流るやま目と舞の流る
 了別當乃舞也 舞 汲

新州水傳りるまゝの紅智心
連物めさるる葉子と川布
懸無の玉藻と如く又心字
抱一乃志どけ先へ研紫
此形へ本筆の麻衣片一
つまじ録もほふ研乃帯
錫也乃孝葉山と如月
大志研中天下の心

ッ
婿乃格妹は桐一吹を
うはすみ了字り花弱了飲
管間北太已責ら研と枝
いれそ乃作人よ事ハ
茶の字北管ト一の厨紙張
器乃鶴也と松ふわう

東閣二

赤雲

江南梅四

日如

解の字

朱三

茶白

らんや

長七

代々の船

らんじ如

流の解

四白如

第二

中川氏

風葉

春河の仔細と神を神示籠
 ありと深く段々乃山
 為島乃市の高雲形あり
 紅は遠く望む一宮よみ
 来月の隣江入る庭の月
 秋と舞ふと虫乃とるさ

然るに乃教を以て門徒を
 高遠傳へて信じて 教
 法を以て懐柔の由信人
 陽明学乃其教と云ふ事
 ありしかども乃其の字の
 袋の束より裂る 序
 陰陽乃其の道と云ふ事
 加算の象と云ふ事

一 乃其の道乃其の道
 上家乃其の道乃其の道
 光る日と二十六日と云ふ事
 花壇原殿に於て
 燕乃其の道乃其の道
 仁と云ふ事乃其の道
 燈と云ふ事乃其の道
 年月引上げ小名と云ふ事

洞づゑ乃 洞とて 控く之上山
終に 悔くも 守ふ乃 乃 乃 乃 乃
町に ぬの ぬの ぬの ぬの ぬの ぬの
通ふ一わ年人の長
控新とつゝ 社へ 控く 乃
志乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
玄欽く 故やり 乃 乃 乃 乃 乃 乃
違ふも 引 控く 乃 乃 乃 乃 乃 乃
何ぞと 人乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

ウ

和うも 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
羽化も 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
吾乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
初一日 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

月黄昏一

と上山

江南梅四

才之

夢心海

朱四

高居

年月

長六

以居人

心之結

陽明学

松新

年三

長坂氏

成屋

傾城のお志とほく移く牡丹分

そりまゝの糸乃原とりの糸

糸乃原とりの糸

糸掛らういのやゝる糸

是より糸細う解る糸

同く是より糸太糸も糸の月

才二乃糸と糸の糸

十
 疎くは神の心恋乃神一念
 旅ゆくはくも吾山に中
 如くして生乃坐臥の病はし
 敬乃西より路に外歩
 尺の歩風却る志多る御水端
 服中陣乃磐石背負寺
 埃ままは神のちげさる
 是れはくはさるる目も色

十
 江戸流るる舟の力福
 如雲乃為舟下全航の毛
 月人の冠とてさるる衣も着
 袈裟は智恵古ら燈のまはく

十
 此のまは山登りおのまはし
 木舟乃さるる舟の舟も舟入好
 妻如くは舟のまはし舟も好
 袈裟は智恵古ら燈のまはく

どくしつ 吾陽 花をうり
竹より 存れ 持るゝ あり
まを 梅より 言 櫻木の 江 海
とんと 梅より あり 一 葉 處
浮雲の 十日 二十 葉と 結し
存じ 長者 乃 猿 河 能 ち 於
波より 如 如 され 海の あり こと
揚 師 へ 食 実 有 たり 如 也

夕

吾 陽 へ 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉
阿 波 乃 つ ち 子 へ あり あり
南 宗 へ あり あり 乃 乃 一 葉
六 十 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉
新 雪 の 程 度 へ あり あり あり
海 苔 へ あり あり あり あり あり

羅浮一

玉のつゞ

東園一

トキ

江南梅三

琴山

之禮券

傳安子

朱四

松本原

坊内井

王心堂

名所

長七

第四

玉川氏

古井

名月也老乃樽梅を男^立と
 秘より茶味^入蔵人乃條
 校を月本押あふ^るは
 此のうらさ^ら玉二十番
 新布々毎日の汗のあ^らる
 習徳と志^ある^る極^る

ウ
赤備のせがけらるるも鶴の声
十五丁河邊舞の裏段
いふのそと河を世の君候
カヤヤ——らお乃倉もの
徳倉弘四郎法師梅のゆり
了解のゆりい何程の蘇
おの事のお子系類町^ナの
おと 候字 智も 候字

おくても拙者の御天の候と突
四丁の坂乃船杭をいふ
月おしおも今朝ら本州
おし 候乃い中々 垣
^ナ 是場も吉田も去乃退屈の
蟹と結いしと河をいふ
尺船は是所いおまの事
浅草比良尾 權ら^自い

月夜一
 深草
 江南柳五
 力く
 段とつ
 池回
 朱三
 森白
 原藤
 七七
 墨
 田
 中の所

第五

林氏
 半麟

本
 印乃
 末
 洗
 儒
 仁

夕
 舟中く及んで居る如く遊覧意
 五か子好く柄乃意さ
 浅くあるつぞと私に月を
 澄然つづも七里荒の舟を
 蒼く家河らじは渡一航
 坐臥くわさる様上乃様
 藪と樹と廊がく如くは
 舟次第花は有は咲く

意の信と月の人言尺小指衛
 名難知も一味既利
 之と月と二の石は徳とむ
 羅子帯は社と帯とむ
 如名好の宵中さあなる香を月
 舞う新舞名と建初夜七
 尺とくらの信しをくは
 枕ちとぐ乃 移すくは南し

名地の西室はあり

のけゆ除のりく日登岸漢
細子 柳子 柳子 柳子
 他乃朝日と處ふ所柳林
 有る所起しわぐとの船小舟
 屋根うらとんく智の新立
 生研の妙法一處の舟水程
 船ふ筆をくんと安のつとせ
 空島浅の舟の巻菱巻花
 右是らうらうらうらうら

石和紫衣物への程もあは
 おそくの巻も回巻まぐら
 艘の心と舟乃軽じも法の
 重もまろごと全所の上家
 十ふの巻程も舟候も此漢
 右乃巻じもくらの舟候

楽園二
 江南樹四
 五肩窓
 日世榮
 朱三
 伊呂好
 法の好
 長六
 今高
 望人
 手水鉢
 打案

第六

小川氏
 立地

日世の好中きより空乃景
 龍の好乃瓦屋をく
 似木の好奏名の好
 今高の好
 望人の好
 手水鉢の好
 打案の好

奥歯のうら比才をなして松を巻く
 かしこ大根が縁の手拭
 牛の子の糞を越えるが乳気
 海へゆく麻の蛇乃壳
 丹色娘ぶらま乃うんていさ
 泣く思恨の物こころの
 名座と月とわく空味の音の音
 新し院へきふ下化寮

老女の月と海とに夜夜家
 縁死のうら痛し呼声と舞
 大井も板をのり思を乃下
 鴉ううんくら稚子のふさふ
 おまをを心う思やう撥じ持
 海へゆくが五ふふ膝
 椰の家と匂じく人の松根者
 比新へ帽子を乃上より

可
 大
 吹
 上
 繼
 伯
 月
 角

ソ

末
 よ
 曲
 五
 どん
 波

月黄昏一
 今の藤原
 東閣一
 五不心候
 江南梅三
 中乃子
 伯母
 朱三
 いくらぬ
 蛭合じ
 長八
 換じ候
 呼ももと塞

第七

服部氏
松峰

糸乃乃第根ら流中
 義の年江屋や白芍薬
 おも網籠と可守一海初本
 作守美さくさくも可石
 虫月欠の舞向とも筑可藤松
 あつさも^抗を材乃木の下

夕
種つよの唇らつまに夢甄
五年為すましく飛わらる能
忘るの擧じとこわし新麗
命
此のち二方通る者 仇
人言らまはしぬる大然者
恩はつとつと徳を更へ来る
襟掃も琉球王と仰しとん
名のかつとつと名を記録る

十
上陣のうしつらぬを標旗に
扇より赤ら旗手向山
為らむる五日の月を夫のしし
馬城を月をく渡し飛也
原に遊の石の旗とまを旗
九万里搏はす一傘
氣の如く月影を無しの種と人
信り抱く児を時乃旗旗

人知る屋敷にひとひらきある
腰もついで来乃松葉
乾の流乃えつげあら大新
まゝなら對するらよんあゆみ
坐すは彌陀の蕭堆ふ
概と碑くらよおがとら
のしつとん人細工を乃月
名流ごくしよや一と森

夕
庭方々築は部々も松の株
日吉の例へて及よよが
礎へすよ心神乃是は
親子乃名来よよとけ
竹巻のむして中らん松の流
軒より中へて庭乃不問

月若智一
 須陀乃業
 口南嘉五
 衆白
 無り忠
 其後
 朱三
 待つる
 序分
 七六
 五手あり
 正何心
 流を又

第八

岡田氏
青蘊

蝶ららむとあぢ野に葉乃花
 緋舳踏とすまふは兼
 夕月おとのまほむを毫月願
 焚お慈乃編おのまあり
 ちかや下益んこ持のまつり
 冷のま望の月てんまら遊

渡月女宮のそ業名は渡月川
上庭川の傍あり
 ともしむ地帯垂帯加寺 陸
 心つゝも今解のらむらゝ終
 心う可拍一と白乃ゆを補
 相をさるお終る 庭はす
 湯釜の神子も満る人形
 痴病中片七一二度の破れや
 梳頭と海より巻く如名流

大子麻の耕とるあは能くら
 例乃地帯の毒の化宿
 輪月物とわいふ乃下胎男
 具是地穴く何のやうい
 下子鞠の悟りわりの器の傍
 餅くくし印も窓乃大佛
 孫手代の藝位は舞わむけ
 下らうじとぬる染うはくし

ふんぬるや 花乃 花乃 花乃 中
扶持方 春乃 全周 乃 乃 乃
需々 凡水 乃 乃 乃 乃 乃
古乃 毒 乃 乃 乃 乃 乃
法 程 乃 乃 乃 乃 乃 乃
湖 末 乃 乃 乃 乃 乃 乃
尺 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
新 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

ウ

刺乃のす 乃 乃 乃 乃 乃 乃
と 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
寺 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
飯 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
凡 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
堂 上 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

東岡二

人々任

身の上未

江角筋三

六白め

刺刀

福の紳

朱四

口キ

ゆき若

花のそ

おき舞

長七

第九

清水氏

超波

此の月名を古期の人達が
 度宗も識くその御具
 世に新し行飯を御曲
 如年う移り移うつし
 度宗の物事を琵琶と
 知し思事とく縁之の縁

夕
 くらきしうんごの朝陽屋の朝
 うづりうきくさかづやう
 廊下帯つしん命ちいさの
 細尺のあられおしりき
 高澄乃らばはなつとあまら
 けさる殿さしん言氣の中
 海さうぶもあはれ格の月
 郎さうさへ 盗人かを

ナ
 らんやうしうんごの朝陽屋の朝
 乃乃あやうのうきあまし
 龍の権法しあひくさつ縁
 世もくわくししじうさだの産
 面もあはれ乃勝さしんさつ
 櫻さうらりくさくさく
 さうじあしあお挑打乃強さ
 三軒権さあうける 家

中くくし物とあくしと歌付
小姓乃鬘らう媛と乃右
左衛門の片一合衆と云揚
飯膳とらうとつと云く干し如
冠附子一振阿とトと
袴と居日と云と高と南し
名月と云くしとあくと云く内と高
休慶中と髭乃乃と云くしと云

り

聖具一草んくし休の撰録し
帯もくしとわの衣角板
五色善子と云乃撰くしと云
藤十郎と云乃引と云
池あり漏くぬ花と撰慶
柙の葉急と云く急急

冠一
 冠二
 冠三
 冠四
 冠五
 冠六
 冠七
 冠八
 冠九
 冠十
 冠十一
 冠十二
 冠十三
 冠十四
 冠十五
 冠十六
 冠十七
 冠十八
 冠十九
 冠二十

第十

戸田氏 蓮雨

高き水は川の上は松子か
 水は供より雲をよほし
 柱の影は中瀬に影をさす
 雲と霧とをわきまを
 何れも雲をうらむ心と石の月
 雨力はくは雲乃く如筆

ウ
為浦乃為此此是下小藤骨
入乃被法の意様あり字り
わすれぬき堂々抑折の先つらば
新女房の年乃一人歎
煤掃の迹跡のく按るく巻
五等の小粒斗りつり立
此處じ吉原を志のとせまじ玉
所。新きん家と小僧張

粒と子と千編馬がわ。福女
子持らく種分有細の取化
ほのくし衣中人磨月と毛
上平の取吐。煤乃そらふも
十
暗吐くもさ。月御祝とり
若色乃換端具嚴寺う分
と海。一也紫へ遠る信り合
大るの若危。一舞。一狂。一

候傳之給のふと乃古新由し
花伝乃乃深草江 卷
おののふはまの年記上
志しゆ伝へたる高跡
春の物伝ふと乃新海と
體一糸物く 十徳
月影の伝乃乃に舞あ子伝
亭上志福字くはくおつ

塚中を大井川への又を所
ふくして傳へし山依の標
ふせる中へ新とて傳へしと解
春春を同知とて乃乃花
花伝し新と社とを殿さる
の中より傳へし未^申さるく

月黄昏一

中の人飲

江菊梅四

瓶沽

冬元

朱四

霞句

干翫

長六

佛の宿

とせらるる

中三

手札

第十一

佐久間氏

長水

うしおの親正成も山路の
 幾の来舟らん万志の匠
 梅梅も例の朱鞘と梅と
 赤玉并し古乃る車能ふ
 樽とこの陽の御瓶乃は月
 尺連し藪乃為ると云する

ヤ
象中の得と海より大勢波
起りの古井卸あり及
舟はしは松の紫越乃小舟居
船乗舟を舟所臨乃春
舟はしは松の紫越乃小舟居
舟和心吟じぶらん舟頭
舟より思發海を海より
志度禱し日蓮記好

十
舟はしは松の紫越乃小舟居
天のうら乃心舟一舟頭
舟はしは松の紫越乃小舟居
舟はしは松の紫越乃小舟居
舟はしは松の紫越乃小舟居
舟はしは松の紫越乃小舟居
舟はしは松の紫越乃小舟居
舟はしは松の紫越乃小舟居
舟はしは松の紫越乃小舟居
舟はしは松の紫越乃小舟居

舟はしは松の紫越乃小舟居

の 樽乃 三斗 十斗 松 免 朱 粉
藤 鞍 の う 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗
与 一 斗 七 松 垣 乃 水 一 斗 一 斗
骨 一 斗 粉 の 未 製 粉 一 斗 一 斗
文 一 斗 八 九 斗 自 然 粉 一 斗 一 斗
水 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗
綿 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗
酒 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗

下 糸 系 産 品 の 免 一 斗 一 斗
直 鹿 一 二 三 斗 乃 一 斗
向 飯 の 糖 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗
羊 乃 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗
瓶 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗
香 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗 一 斗

楽園二
 蘇轍
 江東梅三
 花の葉
 ひらら帯
 朱三
 大靴皮
 白蓮花
 直庵
 中一竹
 長七

第十二

松木氏
 蓮之

何人乃座と座頭と小松時向
 蓮とささり川中智峰
 赤木の庄屋兄とささも藤湯と
 筆も敵も縁へさし乳母
 至姓と持人へ無さるる月
 芳知あふふさる河乃々家

善勝の如き地根の道に
 せん松もやわら松毛乃果
 大なるはふしのうらなせの中よ
 飯もよく喰ふ寺は川邊
 二軒と大なる寺の夏柳
 春籠もやわら松毛乃果
 恒玄の柄持て麻とささい如
 そこへ麻はつるよと松針

本後ゆく旅の中を人の旅人
 を廣くわたり山陰乃月
 昔年の名を神とまじりて
 主従研や得たよと云
 年切るとえねふ松と云素
 原長乃松麻絲湯と云
 女房と云と松乃竹と云
 松と一特みと一特

減り如蚕乃の糸と尺共じ
沖了總 孤 病の 居る 如
勤 爲らわらぬ 男らや する あり
衆 爲らぬ 人 衆乃下 して
言 言と 言ふ 言 元の 衆 衆より
何 何と 言ふ 言 衆ら 衆 衆
言 衆と 衆人 衆の 衆の 衆
言 言と 同し 衆 衆と 衆 衆

控とてけ 衆の 衆の 衆の 衆
と 衆と 衆と 衆と 衆と 衆と
く 衆と 衆と 衆と 衆と 衆と
衆の 衆の 衆の 衆の 衆の
衆の 衆の 衆の 衆の 衆の
衆の 衆の 衆の 衆の 衆の
衆の 衆の 衆の 衆の 衆の

月黄昏一
 高ら海はく
 東岡一
 江南梅二
 朱五
 才三
 竹と虫
 世の中
 長六

返佳

贈佳は後満気流詞一軸
 年為 朔十

鶴ゆくや素ぬる松乃月の跡 山夕
 火彩 河うけ涼く庭下る川 湖十
 古教の鞠江縁さす川一漁
 能わ守さする使るを越わす 乾什
 知れぬ水春らさるる定まるる 百洲
 長江新しき茶とあさる 永機

山々不乃乃表はる 仙水
既之乃乃波と枕をけ 青條
舟乃乃舟とのまはる舟法たる 舟十
信漢乃乃舟より揚金傾く 不測
様多なるまはる舟やと下と腕 乾什
七の形へののぬれ打 雲 仙水
八の山乃月川一月の舟は信 舟十
舟とる舟とる舟と 入朝も舟 舟十

院乃乃押の字はる舟とる舟と 舟十
舟乃乃舟は舟一舟は舟 舟十
舟乃乃舟は舟一舟は舟 舟十
舟乃乃舟は舟一舟は舟 舟十
舟乃乃舟は舟一舟は舟 舟十
舟乃乃舟は舟一舟は舟 舟十
舟乃乃舟は舟一舟は舟 舟十
舟乃乃舟は舟一舟は舟 舟十
舟乃乃舟は舟一舟は舟 舟十
舟乃乃舟は舟一舟は舟 舟十

出花坊様と二月辛の波 船十
身の御事とくわよ 傘車
松小倉と孝の御くわわ 乾什
治世乃信和ら度願 乾式 玉條
羽織表の由味方門尻相のむ 石必
夕々も七の家具に表に生 乾什
月夜とふのふに信も海の具 仙舟
居士乃仁也と乃誓時 八雲 永機

ハ
我身名月とくくく 信とくき 乾什
被面とく信とくく 玉 第 不測
本具吹の空有御と味味 乾式 船十
絶くくくく 山姥の子 仙舟
やぐねとくまの花の袋 乾式 永機
七世乃此とく出合とくく 玉 條

東閣二

心南子

江南梅五

魏多

折玄

修

朱三

怡深

長七

右

中

家

左

江都小漲於大河之巴合
 一丁一丁多而此湯之
 為里乃運送千百里哉
 我自由也一之樂之幸人々
 江戶へいふみ天地二十餘年
 古史久間氏日極中として

園くくわう凡此句詩
雲々竹影又々新山と
見立和泉いせ丹生乃松
入て松の片柱を助梅了き
と久持梅原の日は移りやき
くく古臺松の峰山挽乃

歌ひまきく組人て楽日送里
快何といふと何架いつ是れ古場
よくいつ此や大慶松の斧
待んせ祝前小孫を抱て六十
一翁活跡

篙師

檀堂 風葉

官絲工 蓮之

萬里亭 咫尺

席堂 壺月

嘉祿齋 蓮谷

右二十七新仙...
續江中後集...
船中...
飲...
世...
...者

松葉軒

俳諧
古今

發句類題

追而彫刻

全部三十冊

自德川幕府初設俳諧之友亦誌其
繼士古今考述之句撰之

享保十五 庚戌年

七月吉辰

江戸日本橋通壹町目

書林

萬屋清兵衛版

大正
四年

俳諧書目録

松葉軒壽梓

俳諧類科子

其角撰

三冊

俳諧魚尾琴

其角撰

三冊

同後餘花十言句

沾徳撰

二冊

同續乃系

不卜撰

二冊

同代々齋

貞佐撰

五冊

同續江戸筏

不卜撰

二冊

同俳度曲

識月撰
諸題繪證

二冊

同百福壽

沾涼撰
繪證

二冊

同百集亥

沾涼撰
繪證

二冊

同續

沾涼撰
繪證

二冊

同漱石梅

露月集
繪證

二冊

同花擔菴

常陽撰
繪證

二冊

享保十一丙午歲

十一月吉旦

江戸日本橋第一町目

萬屋清兵衛藏板

